研　究　業　績

ナンキンムシの発生事例について

富山保健所　中　川　秀　幸
得　地　豊　治

1．はじめに

戦後の混乱期以降ＤＤＴなどの有機塩素系の薬剤使用によって絶滅したかに思われていた衛生害虫が，最近次々と登場してきている。その一例として富山県内で久しく聞かれなかったナンキンムシ（トコジラミ）の発生届け出があった。

2．探　　知

昭和59年８月３日富山市の住民（一般サラリーマン家庭）から夜間就眠中に刺される虫の調査を依頼された。

3．形　　態

体長は４～８㎜背腹に遍平で灰褐色内至茶褐色を呈し半数は吸血していた。わが国で最も普通のナンキンムシ(Cimex lectularius L)である。

4．環境調査

(1)　住居と周辺

富山市諏訪川原２丁目市街地住宅密集地帯の一般住宅で新築10年目木造瓦葺二階建，建坪約53平米，玄関は西側に面し比較的風通しが良い。しかし南東側は鉄筋ビルが隣接しており日当りは悪い。58年６月シロアリが発生して業者に駆除依頼している。

(2)　家族と住居

主人52才会社員、妻56才茶の師範、娘36才会社員，孫７才小学生及び４才保育園児の５人で昼は茶室として使用している座敷10畳に就寝している。隣室は和室６畳と板張りの居間でそれに台所が続いている。夏季は二階では就寝していない。

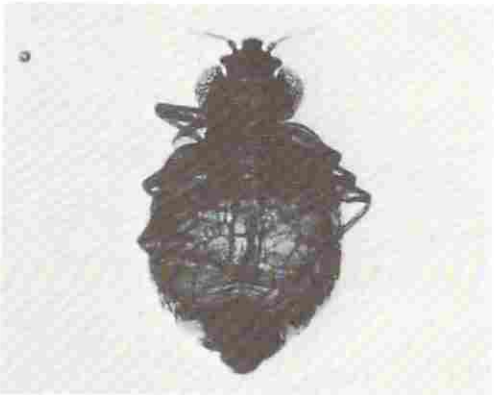
5．生息調査

(1)　発生源と分布状況

人と共通の宿主であるペットなどの鳥獣は居なく，勤務先（主人，娘）や，小学校，保育所（孫）での本虫による被害者は聞かれない。隣接の住宅を調査したがその発生は見られない。

(2)　生息場所

本虫は一般に畳の間、柱の割れ目、床板の継ぎ目，壁の間，天井などが日中の生息場所とされている。実際被害を受けている場所は一階和室10畳の座敷に限られているが，そこには隙間となるような物件は比較的少なく茶道具茶棚一式のみが置かれ，畳の下には新聞紙が敷かれてあった。仔細に調べたが昼間虫



富山衛研・渡辺氏撮影

体を発見することはついに出来なかった。

6．被害調査

(1) 時　　期

59年6月末頃から就寝中頸部の皮膚に発赤と激しいかゆみが時折あってその原因がつかめないまま7月末になって吸血した当該虫の発見に到った。特にビールを飲んで就寝した主人に被害が集中し同衾した孫の幼児は時折刺されているが同室の他の家族には被害はなかったという。

(2) 程　　度

多いときは毎夜半4～6匹捕虫したという。多様な防除方法を講じて被害は少なくなったが9月中頃になってようやく終息した。

7．防除方法

(1) 環境的防除

一階和室の畳を全部天日乾燥し床面の掃除を徹底するとともに生息場所となるような家具等の移動をした。

(2) 薬剤処理

畳の下に有機燐系粉剤（Fenitrothion）を2回，ピレスロイド系（Permethrin）の燻煙を一週間毎に家屋内全室2回更に10畳和室のみ2回，ＤＤＶＰエアゾルを随時かくれ場所となる隙間を中心に噴霧することを9月末まで続けた。

8．考　　察

ナンキンムシは夜行性で白昼虫体が見付からないことと人体への安全性や家具の汚損を配慮して薬剤散布が十分行き渡らないこともあってその駆除はかなり厄介である。また寒冷に強く，低温の時は6ヵ月以上も吸血しないで生存するというので温暖の季節の到来によらなければ果たして駆除されたのか気温が低くなって活動しなくなり越冬に入ったものかその結果が判明しない。いづれにしても発生源のつかめない単発事例で吸血による真夏の急激な繁殖増加と活動によってのみ知ることが出来たものである。

9．参考文献

島田篤夫；生活と環境　Vol. 28, No.8 '83

Musco ＶＡＪＲ；ASTM　Stand News　Vol.12, No. 6 '84

前田　健；皮膚科の臨床　Vol. 26; No. 11 '84